

令和6年度 第3回 学校運営協議会

1 日 時 令和7年1月15日(水) 15時30分～16時45分

2 場 所 本校会議室

3 出席者(運営協議会委員)

松宮 新吾(追手門学院大学教授)

河原林 昌樹(弁護士)

鈴木 貴雄(門真市立第四中学校長)

高山 拓也(門真市教育委員会学校教育課長)

三村 泰久(門真市立水桜小学校長)

猪井 美由紀(本校PTA会長)

4 出席者(学校)

校長、教頭、首席、各分掌、各学年

5 議題等(次第順)

【大阪府高等学校総合学科研究発表大会報告】

【審議事項】

(1) 令和6年度学校経営計画及び学校評価について【承認】

(2) 令和7年度の学校経営計画について【承認】

【報告事項】

(1) 今年度の教育活動の振り返り

(2) その他報告(進路状況、DXハイスクール、修学旅行)

6 意見・質問事項等(概要)

○令和6年度学校経営計画及び学校評価について

- ・多文化共生の理解について、潜在的に外国籍の子どもたちと一緒に常に学ぶ環境が非常に生かされている。アンケートの数値がここまで高いのなら、理解のレベルから一歩進んで多文化をマネジメントしながら何か結果を生み出すことができるといったようなところまで高校生で求めていくことができるのではないか。探求とか共同学習とかそういったもので成果が生まれてくるのかと思うところまで期待される報告であった。
- ・「教え方の工夫」というところで、数値が下がっているが、学校で何か工夫されているところはあるか。
→10年経験者研修受講者が中心となって公開授業週間など企画・運営してもらっている。また、次年度は年2回の授業アンケートをどう生かしていくか考えていきたい。
- ・「教え方を工夫している」というアンケート項目が、学校が目指しているところと一致しているのか。生徒に対しての質問では「学ぶ中でどんな工夫をして学ん

でいますか」、先生に対しては「生徒が主体的に学んでいけるように先生は支援してくれていますか」となるのでは。

- ・なみはやでは、生徒自身が自分の学習を工夫改善していける「自己管理型の学習者」となるようなスキルを身に付けていけることが大きなポイントになるのではないか。
- ・教員自身がしっかり考え行動できる「自走する教職員集団」、「自走する」というおもしろい捉え方で、生徒への教育にも還元できるのではないか。

○令和7年度学校経営計画について

- ・「先生がどう教えたか？」という観点よりも「子どもがどう学んだか？」という指標に変えていくべき。補習についても同様である。
- ・部活動加入率はどうか。中学校でもどんどん変わっている。加入率よりも子どものリーダーシップを見ていくほうがよいのでは。ただ、加入率が少ないのは寂しい。
- ・生徒の発表を聞いて、「自分たちの主体性をもって学んできた」というのが本校の良さではないか。評価指標はそのことが見えるものがないのではないかと。もっと「子どものやってるぜ」というのが見える数値が分かれば。
- ・保護者視点でみると、高校の評価の中に「補習」の項目があるのはうれしいし大事だと思う。
- ・先生の工夫が最終的には生徒の学びに結びついていくような、十分クロスして反映されているような評価項目を作っていけばいいと思う。
- ・生徒が主語となる質問項目に変えていけば、先生方の工夫や努力が生徒の学習成果に反映されるようなことにも繋がっていく。

○その他

- ・数値目標については相対的に高い評価をあげているが、高い目標を達成できているのは先生方のお蔭かと思うが、それが何なのかを分析してください。
- ・「主体的に学ぶ子ども」が小学校でも目標であるが、なみはやの子どもは学校の満足感が高いと思う。なみはやの生徒は朝に挨拶しても大きな声で返してくれる。
- ・この限られた時間の中で、なみはやの取組を伝えようとする先生方の姿勢が、日々の授業にも繋がっているのではないかと。
- ・コロナの時代を思うと、修学旅行に沖縄へ行くというのは生徒も喜んでいるのではないかと思うし、一番喜んでいるのは先生じゃないかと思う。「よく学び、よく遊ぶ」という実践をこれからも続けていってほしい。